
一刀と彼方と重次の恋姫物語

kddo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一刀と彼方と重次の恋姫物語

【Nコード】

N1135N

【作者名】

k d d o

【あらすじ】

恋姫の始まりに一刀だけではなく一刀の友達も巻き込まれ皆で暴れまくる？

プロローグ

かぜみやかなた
風宮彼方彼は聖フランチェスカ学園にかよっている。

結構なイケメンで無口である。男だが女装すれば女に見えなくはない。

彼は今、美術館に行く途中だ。

？「おい彼方、聞いてんのか」

こいつは北郷ほんこうかずと一刀彼方の親友だ。かなりもてる。たまにイラッてくるが気にしない。

彼方「・・・すまない、考え事をしていた」

一刀「そんなことよりなんで美術館にいきこうと思ったんだ？」

彼方「・・・ちょっと見てみたいものがあつたから」

一刀「へー珍しいな、お前がそんなもの見たがるなんて」

しばらく歩くと美術館が見えて二人は中にはいった。

彼方「・・・これ」

彼方が指を指した先にはゲルニカだった。

一刀「へーこの絵か、たしかえーと」

彼方「・・・この絵はパブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネポムセノ・マリア・デ・ロス・メネディオス・

クリスピン・クリスピニャーノ・デ・ラ・サンテシマ・トリニダット・イ・ピカソが書いた絵だよ」

一刀「・・・あ、あーそうだな（誰だー！）」
こいつ、もとい彼方はとてつもなく頭がいい。

そうしてしばらくすると彼方が歴史館にいきたいと言い出した。

一刀「いいけど、いきなりどうしたんだ？・・・ん？なるほど」
彼方は三国志の本を取り出して見せた。

彼方「・・・見たい」
一刀をジーっと見てくる。

一刀「わかった、わかった、じゃあいこう」
そうして美術館を出て歴史館に向かった。
着いたのは閉館30分前だった。

彼方「・・・銅鏡」
なぜか彼方は三国志の物を見ず銅鏡をじっと見ていた。
結局彼方はずっと銅鏡を閉館まで見ていた。

すると、向こうからまた親友の片倉重次かたくらしゅうじが来た。
彼は剣道をやっているが真剣を使って山へ修行していたりする。

重次「おう、一刀と彼方ではないか、こんなところでどうした？」
彼方は重次は他の人より仲が良いがそこまであったりしない。

一刀「美術館と歴史館に行ってたんだ、彼方が見たいっていったからな」

重次「ほー、お主らはそこまできておったか」

一刀「俺はそんな趣味はない！」

彼方「・・・気持ち悪」

一刀「おい彼方、なぜそんなに俺と距離をとるんだ、あれはあいつの冗談だぞ！本気にするな！」

彼方「・・・わかった、信じる」

とりあえず落ち着き楽しく三人は話していると、

パリーン！

突然歴史館の窓が割れて男が出てきた。

その男は何かを持ってこつちへ走ってくる。すると、

重次「その者、止まって歴史館から盗ったものを返すのだ。そうすれば見逃してやろう」

一刀「見逃しちや駄目だろう！」
ごもつともです。

しかし男はそのまま走ってくる。それを確認すると重次は背中から長刀を抜いた。

つて、銃刀法違反だー！

重次はそのまま男を峰で殴った……と思ったら男が持っていた歴史館の盗んだ物に当たった。

男はニヤツと笑うとその男は消えて盗んだ物だけ残った。

重次「あの男何者なのだ？」

彼方「……銅鏡」

一刀「あっあの時の銅鏡か」

一刀が触ろうとした瞬間

ぱきっん

銅鏡が割れた

一刀「は……はあー！？重次お前力入れすぎだ！割れちまったぞ！」

重次「……オラシラネ」
誤魔化した。

そんなことを言っていると割れた銅鏡がいきなり光始めた。

三人はなにも話せなくなり光に包まれた。

新たな外史が始まる。

プロローグ（後書き）

よろしくお願ひします

第1話 劉備、関羽、張飛に会うこと

三人は光に巻き込まれその場所から姿を消した。

知らないうちに三人は荒野にいた。三人は倒れている。しばらくして彼方が起きた。

彼方「……ここはどこ？」

やはり彼方は無表情。こうゆう時くらい表情変えるよ。

そうしてると二人も起きた。

一刀「う・ん、ここは……どこだ？」

重次「……ここは日本でないことは分かるな」
すると後ろから声がした。

？「おい、兄ちゃん達大人しく金目のもん出せや」
振り向くと黄色い服を着た男が三人立っていた。

一刀「うわー雑魚キャラっぽいWコスプレW」

？「なんだと！」

リーダーっぽい人が叫んだ。

一刀「重次、殺っちゃって」

重次「おう、任しとけ……って殺んねーぞ！」

? 「お前ら！ やっちまえ！」

黄色い服を着た男が二人がかかってきた。

重次は自分の荷物（荷物は何故かあった）から木刀を取り出した。

重次は腰に木刀を構え、体を落ち着かせて次の瞬間

? 「ぐえっ」

近付いてくる敵は見えない速さで居合いして敵がぶっとんだ。
なにもんだよ。

それに驚いて敵は逃げていた。

一段落すると、女の声が聞こえてきた。

? 「お見事です」

黒髪の綺麗な髪をした女が話しかけてきた。

? 「見えなかったのだ」

今度は赤髪の女の子が話しかけてきた。

? 「すごい」

今度はピンクの髪の胸がでかい女が話しかけてきた。

一刀 「あんたら何者？」

? 「申し遅れました、我が名は関羽、字は雲長」

? 「 鈴々は張飛、字は翼徳なのだ」

? 「そして私が劉備、字は玄德よろしくね！」

一刀「成る程な、ここは三国志の世界でまだ黄巾の乱は始まってないところか」
状況を確認していると、

重次「でっ俺達に何か用なんだろ？」

重次が劉備達に問い掛けた。それに対して劉備達はびっくりして

関羽「はい、貴殿方に天の御遣いになってほしいのです」

しばらく一刀は固まって

一刀「はあいいいい？いきなり過ぎてわからなくなってきたー」

しばらく暴れて落ち着かせた一刀、原作とめっちゃ違うねw

一刀「ふー、でっなんで俺たちなんだ？」

関羽「それは町で見かけた占い師から（この乱世で三人の天の御遣いが舞い降りてこの乱世を救うだろう。一人は無口の軍師、もう一人は居合いの武士、もう一人は一国の主になる者があらわれるだろう）と言われ、場所を言われここに来たのです」

話してるとき張飛と彼方があそんでいた。彼方が他の子と遊ぶところ初めて見たな、っと一刀は思った。

一刀「成る程な、確かに二人は合ってるだろう、しかし俺だけなぜ合っていない！」

彼方「・・・あつてると思う」

彼方が無表情で言ってきた。

重次「あつてると思うぞ、いつもリーダー的存在だろう、お前は励ましてる？ ばいかな？」

関羽「合っていますよ。それに貴方達は優しい感じがします」

劉備「お願い！ 私たちの力になって！」

真剣に一刀は考えていると

彼方「・・・なつても良い」

彼方は賛成らしい。

彼方「・・・鈴々から聞いた、この人達、人、たくさん助けるため、戦つてる」

途切れ途切れしているけど彼方の言う事は伝わった。

重次「俺も賛成だ、今より劉備達に付いていった方が良いし、そんなことを聞いて黙つて見過ごせん！」

重次は結構かつこいい台詞を言つて彼方に賛成した。

一刀「いいよ、俺もそうゆうの見過ごせないし、こんな女の子達だけでやらせないよ、こんなにも可愛いのに」

劉備、関羽「ツツツツ！！！！！！」

二人は顔を真っ赤にした。

彼方「・・・出たよ、フラグをたてまくる一刀の能力」

重次（罪な男だ）

黙りこんだまま顔を真っ赤にしている二人に一刀は

「刀」どうしたの？風邪？顔が赤いよ」

二人の顔に顔を近付けた。

また顔を真っ赤にした二人。

重次（あいつあんなこと良くできるな、普通できんしかなりの鈍感だしな。あいつ）

重く考えている重次。

重次「そろそろ本題にはいるぞ、イチヤイチャしてないで戻ってこ
ーい」

その言葉で我に帰る二人。

重次「近くに町はあるか？」

関羽「はっはい、ここから二里先に小さな村があります。そこで義
勇軍を作ろうかと思ひまして」

慌てて関羽は言った。

重次「よし、じゃあ決まりで。そこに急いでいくぞ」

こうしてまず俺達は義勇軍を作ることになった。

張飛と彼方はまだ遊んでいた。

あいつ一応高校生だぞ。

第1話 劉備、関羽、張飛に会うこと（後書き）

頑張りますのでよろしくお願いします

主人公紹介

北郷一刀原作の主人公

聖フランチェスカ学園の生徒。みんなも知ってる、フラグのか溜まり。作者はこいつが嫌いです。なので省略。

一刀「おい！」

風宮彼方第2の主人公

一刀と一緒に聖フランチェスカ学園の生徒でクラスは一緒。無口でかなり頭がいい。だが、可愛い物と興味がある物と子供が大好き（主に女の子）

一刀と重次以外あまりはなさないが可愛い子供（女の子）だけは誰にでもなつく。

実はかなり強く、どこかの暗殺部隊に入っていたことがあるとか超能力が使えるなどの噂がある。（本当かは誰も知らない）身長は160センチで女装すれば女に見えなくはない。

片倉重次第3の主人公

一刀と彼方と一緒に聖フランチェスカ学園の生徒でクラスは違う。元気でとてもたよりにできる人、三人の兄的な感じ。

剣道をやっているが、真剣を持って山に修行しに行くという変なところがある。

顔は普通でそこまでもてない。

重次「余計なお世話だ！」

身長は170センチ位で筋肉は結構付いている。

まだオリキャラ出すつもりですのでよろしくー！

ー刀、重次「好き勝手言いやがって、死ねー！ー！ー！ー」

作者「うぎゃあああああああ」

主人公紹介（後書き）

頑張りましゅ

第2話 義勇軍で賊を葬る

突然三国志の世界でしかも三国の人が女である世界に来てしまった一刀達。

劉備達に出会ってついていくことになる。義勇軍を作ることとで近くの村へ行く一刀達と劉備達。どんなことになるでしょう。

「近くの村」

一刀達は村についた、しかし一刀は見ていることが現実とはおもえなかった。

村の人々は賊に襲撃されたのか腕が落ちていて腕がないまま死んだ人や、首が転がっていたりなど映画のような光景だった。

「一刀「うえっグロすぎだ、映画で見るより現実で見ると全然違うな」

彼方「・・・遅かった」

彼方は悔しがってそう言った。てかこんなときでも無表情なのね。

重次「好き勝手やりおって、くそっ!!」

重次は拳を地面のぶつけていた。

関羽「くっ我々がもつと早く来ておれば!」
関羽も悔しがっていた。

劉備「早く世の中平和になれば良いのに」
落ち込みながら言う劉備。

一刀は思った、早く戦を終わらせよ、そして平和な世の中にしていこう。

考えたり悲しんだり悔しがってたりしていると

張飛「おーい、村の人はここにいるのだー」

張飛が店の前で叫んでいた。

関羽達と一刀は店に入っていた。

重次は刀を磨いていた、刀は七本あり、背中に長刀を一本、腰に日本刀を六本さした。

彼方はごそごそと自分の荷物から変な手袋をはめて体にいろんな装備をしていた。

てかいつもそんなもん持ち歩いてたんかよ！彼方はまだいかな？重次は刀七本って駄目じゃん！

そんなこんなで義勇軍は集まった。一刀が二人の格好を見てちよつと呆れていた。

いよいよ戦が始まる。

敵は1000、こちらは800

関羽と張飛と重次は先陣をきって出ていった。

部隊を4つに分けてまず関羽と張飛と重次達の部隊で蹴散らしたあと一旦退却して村まで誘き寄せろ。

そのあと村の入り口のとこに落とし穴を作っておきそこにはめてフルボコ。

残った敵は穴にはまって混乱している間に村の他の入り口から後ろに回り込み関羽と張飛の部隊でFinish!

と言うことで作戦開始!!

まずは敵を蹴散らす・・・うわー重次半端ねー。

何をやってるかわからんが敵が宙に浮いている時点重次しか出来ない。

そろそろ引くかな。

銅鑼の音がなった。ついでに言うど部隊を動かしてるのは彼方である。結構仕切るのが上手い彼方である。

こっちに引いてきたぞ、敵も付いてきた。

ガラガラガラ

敵が落ちた。彼方が命令を出してフルボコ

後ろからの奇襲成功!これで終わりだな。

と思った瞬間、彼方に三人ほど穴から出てきて斬りかかろうとしているやつらがいた。

「一刀「彼方!危ない!!」

当たる瞬間剣が細切れにおれて敵が唾然としていた。

彼方はずっと後ろを向いたまま、何か敵に言っ手振った。

すると、三人の敵は体から血を吹き出して死んだ。

「一刀がそれを見ていて彼方に近付き、

「一刀「彼方、お前何者だ？」

すると彼方は

彼方「・・・特殊暗殺部隊隊長、超能力者、言ってなかった？」

彼方は不思議そうな顔をした。

「こいつこつゆうつとき女に見えるだよな」。

彼方「・・・どうしたの？」

「ジーとこちらを見てくる。」

「一刀「悪い、凄すぎてビックリしてた。てか超能力者?!」
見とれていたことは隠しておこう、また嫌われる。」

彼方「・・・うん、こんなの使える」

「そつゆうつと手のひら上向きにしてふんつと小さな声で彼方が言う。
すると手のひらに氷が乗っていた。」

「逆の手のひらには炎が浮いていた。」

「一刀「流石だな。彼方はスゲーよ。それとさつき賊が勝手に体から
血が吹き出したりしたのはなんなの？」」

彼方「・・・この手袋」

「すると手袋を取り出す見た目はまあ、普通だった。しかし

「一刀「いてっ」

何かに引っ掛かってちょっとだけ指が切れてしまった。

彼方「・・・気を付けて、凄く細いワイヤーが付いている」
先に言っただけ。てかこのワイヤー半端ねー切れ味だぞ！

こうやって会話していると関羽達もやって来た。

しばらく話していると関羽が

関羽「そういえば貴殿方に真名を預けてませんでしたね」
真名？

一刀「真名って何？」
すると答えたのは関羽ではなく

彼方「・・・真名とは本当の名前、真なる名と書いて呼ぶもの。
真名を知っていても許可なく言ったら、死ぬ」
彼方だった。

一刀「ありがと。てかよくしゃべるようになったな、そっちの方が
いいぞ」
笑顔で言う。

彼方「・・・男なのでフラグは効きませんよ、まさかあっち派
ですか？キモ」

グサグサと嫌な風に言われる。

一刀「ちがー！う！だから俺はノーマル！正常な子です！だから
みんな逃げないでくれ！！」
とても慌てて誤解を解こうとしている。

重次「でもなんで彼方は真名のことを知ってるんだ？」
重次が聞いた。

彼方「・・・鈴々から聞いた」
すると

張飛「彼方はいいやつだから真名を教えたのだ」
そんな理由でw

関羽「我らはもう仲間です、我々の真名受け取って下さい」
そうゆくと

関羽「我が真名は愛紗」

張飛「鈴々の真名は鈴々なのだ」

劉備「私、すっかり忘れられていたと思うんですけど、私は桃香」

一刀「愛紗、鈴々、桃香、よろしく！でっ俺たちだけど、俺たち真名無いから好きなように呼んでくれ」

愛紗「分かりました、では一刀様をご主人様、重次殿はそのまま、
風宮殿は彼方殿で」

桃香「じゃあ私はご主人様はご主人様で重次君と彼方君ね」

鈴々「鈴々は一刀兄ちゃん、重次兄ちゃんと彼方兄ちゃんなのだ」
すると重次と彼方は

重次「分かった」

彼方「……（こくり）」
と返事をしてこちらを向き笑ってきた。

一刀「ほんとにいいんだな、分かった、いいよ」
ちよつとにやついていた。

彼方「……変態」

彼方から重い一言貰いましたー。グスン

このあとすごいことが起こる！次回を待て！（期待はするな！）

第2話 義勇軍で賊を葬る（後書き）

一刀sideでいこうと思います
下手ですがよろしくお願いします。

第3話

軍師に会って彼方暴走!!?(前書き)

交通事故で夏休みの半分が入院だったけど、今ここにふっかつ
・・・と言ってもまだ顎が折れてますけど、頑張ります!
応援よろしくお願いします!

第3話 軍師に会って彼方暴走!!!?

こうして黄巾党との初戦は大勝利で終わった。
喜ばなければならぬのに約一名沈んでいる太守がいた。

一刀「……ううー、重次に変態と言われるのは構わないけど
彼方に言われるのは堪えるよ〜」
とても彼方に変態呼ばわりされたのが堪えたらしい。一応言っが彼
方は男だ、ここ重要ね。

重次（おい彼方、さすがに言い過ぎだ。あそこまで落ち込んでるの
は重傷だぞ）

重次が一刀に気付かれないように彼方に話す。

彼方「……ハァー、わかった、謝ってくる」

渋々彼方も納得してくれたようだ。

すると彼方は一刀に近寄っていき一刀になにか話している。たぶん
謝ってると思うが、

一刀「うわああああああんんんんー」

一刀がいきなり大泣きし初めた。やっぱり止めを指したか。

彼方が帰ってきた。

重次「一体何を言ったんだー？（；；、）」

一応聞いておく重次。

彼方「男がメソメソ泣くな、キモいんだよ！このホモキモ女たらし
野郎！……って言っただけ」

それは追い討ちをかけたただけです彼方さん。それと、

重次「お前そんなはつきりと言葉を言えたんだな・・・」
あきれた感じで言ってみた。

彼方「・・・いじくれる人の場合・・・その口調になる。・・・興
味がないと相手にしない」

さらりと言う彼方にSの素質があるのではっと考える重次。

そのあと桃香達に来て一刀がなぜこうなったかを聞いたあと桃香は
慰めていて、愛紗は少しふくれ面をし、鈴々は笑っていた。

数時間後・・・

一刀「・・・グスン、みんな迷惑かけてごめんな」

重次「やっと立ち直ったか、では、次はどこへ向かうかきめよう」
重次が一刀の代わりに次のことを話始めた。

彼方「・・・この戦を勝ったのはいい、けど食糧も少ししかない、
どこかにいれてもらうのがいい」

彼方が問題点をあげた。
確かに今、義勇軍をあげたのはいいが、色々と揃えなくてはならな
い。

一刀「誰か知り合いの人はいないかな？」

一刀が言うと誰もがそんな都合が良いことなんて有るわけがないと
思ったとき、

桃香「私いるよ！たしかこの辺りにパイ蓮ちゃんが治めている所があるし」

「「「「「「「「「「「「」

どうしてはやく言わなかったんだ！！と叫んでいる場合ではないのでそこは無視しときます。

一刀「とつとりあえずそこへいこうか」

一刀「言うともみんな

愛紗「わかりました」

鈴々「分かったのだ」

重次「うん、それが良いだろう」

彼方「……………（渋々）了解」

いろんな返事がきた。おい彼方、渋々ってなんだ！

そうして次の行く所が決まったところで彼方と重次があることに気がき、

重次「何者だ！

大きな声を張り上げた。

すると怯えながらも少し離れた岩の影から二人の幼zy・少女が出てきた。

二人は何やらはわわくやあわわくなど言っていた。すると彼方は

彼方「…………お嬢ちゃん、怯えなくて良いんだよ。僕の名前は風宮

彼方、よろしくね」ニコッ

二人（（ポー））顔真っ赤

いつの間にか二人の目の前に行き、自己紹介済ませて落ち着かせよ

うとしていた。

そう！これが彼方の癖みたいなもので、幼女を見付けるとすかさず口説きにかかるロリコンスキルなのだ。

しかも喋り方もかなり変わり、性格も変わってしまい、危ないことになりかけてしまう。

これを見て重次は呆れ、一刀はこのロリコン野郎ー！と叫んでいたが彼方はそれを自覚しているため全く気にしていないのだ。

桃香達はあまりの性格の変わり方とても驚いているが鈴々だけはさつき遊んでいてあんな感じだったので驚いていない。

さらに固まっている二人に彼方は

彼方「・・・美しすぎる」

とすぐく見つめていて、正気に戻った二人はまた彼方にいじられ気絶してしまった。

彼方「・・・さて、このまま持ち帰るわ。んじゃー！」

二人を担いで何処かへ行こうとする彼方を全員で止めた。そのあと彼方を気絶させて手足を縛って荷物の箱にいれて公孫贖のそこへ出発した。

少女二人は気絶したまんまだった。

第3話

軍師に会って彼方暴走!!?(後書き)

何かぐちゃぐちゃになっちゃったなー

駄作でいつ出すか分かりませんが応援できましたらお願いします。

交通事故は全治2ヶ月でも結構なおつたので普通の生活をしていきます。

・・・彼方ちよっとやり過ぎかな？

こつなったらキャラをどんどん壊していきます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1135n/>

一刀と彼方と重次の恋姫物語

2010年10月16日23時17分発行